

小堀杏奴

晩年の父

岩波書店

小堀杏奴著

晩年の父

岩波書店刊行

昭和十七年九月二十日 第十期發行
昭和二十三年九月二十日 第十期發行

定額百七拾圓



小 堀 春 茂

發行所 東京市大田區神田 三丁目三番地

山 田 一 郎

發行所 東京市大田區神田 三丁目三番地

波 書 店

電話 二〇九〇四號

株式會社大化堂印刷・製本

序

今度岩波書店からの話で、今迄少しづつ書いた物を纏めて一冊の本にする事になった。自分の書いたものが一冊の書物となつて此の世に生れ出ると思ふと本當に嬉しいが、又今更に自分の力の足りない事を思つて一種の不安を感じずにはゐられない。

此の不安は恰度近く生れようとする私の最初の子供に對する、あの不思議な喜びのまじりあふ不安と同じものだ。

そのいづれにも私は希望と深い愛情を感じてゐる。

此處に載せた『晩年の父』及び『思出』は故與謝野寛先生、先生没後には夫人晶子先生が編輯を續けてゐられる雑誌『冬柏』に書かせて頂いてゐたものである。

私がまがりなりにも物を書くやうになつたのは外國への出發に際して與謝野先生をお尋ね

この書を最愛の母上に捧ぐ

目次

晩年の父

..... 一

思出

..... 四一

母から聞いた話

..... 一七九

晩年の父

父が死ぬ前年の夏、私達は千葉縣日在村にある小さい家に出掛けて行つた。そこは外海で波が荒いのと地の利が悪いせゐか、随分長い間開けないで荒れ果てた寂しい土地のまま取残されてゐた。

夜になると、眞暗な中が波の音だけになつて、小さい私を脅やかした。電燈もまだ引かれてなくて、ランプの石油臭い匂ひが遠くへ來てしまつた心細さを感じさせた。

疊も廊下も砂でさらさらして、風がひどいので障子紙が直きに剝がれてしまふのであつた。ごく小さい時から、驚くべき自然の歡喜の中に私は自分を忘れて夢中で過した。新しい事、興味のある事にぶつかつた記憶は、皆この日在の家であつたやうだ。

ずつと前、家の傍の崖に、ふと私は樺色の百合の花がたつた一つ咲いてゐるのを見附けた。

私はどうしてもそれが取りたくなつた。それは非常に美しく見えた。併し砂は太陽で熱く焼けてゐたし、小さい私の體にはその崖がひどく高いものに見えた。登りかけては直ぐ砂が崩れて、たはいなく私は滑り落ちてしまつた。花を採つたかどうかは覚えてゐない。唯私は息をはずませながら、何度も何度も途中まで登つては滑り落ちる悲しい氣持を覚えてゐるだけだ。後になつてみると、それは崖と云ふにはあまりになだらかな傾斜であつた。その年になつて、私達はその海岸が急に開けて來た事を感じた。そして家の前を通つて海に行く知らない人人の姿を見るやうになつた。

私が十三の夏の事だ。母は日に焼けるから一日中外にばかり出てゐてはいけなさと云ふやうになつた。私はその年まで殆ど知らないで過した晝間の家の中を、改めて何か新しいものでも見るやうにじろじろと眺め出した。

千駄木の家も書物で埋まつてゐたが、此處の家も天井に届くまでの棚がすっかり本で埋まつて、唯その本が皆潮臭い感じがした。

父は何時も靜かであつた。葉巻をふかしながら本を讀んでばかりゐる。子供の時、私はときどき元氣な若い父を望んだ。自分の細かいどんな感情をも無言の中に理解してゐてくれる父を無條件で好きではあつたが、父はいつでも靜かだつたし、一緒に泳ぐとか走るとか云ふ事は全然なかつた。何んでも父と一緒にやりたかつた私には、それがひどくつまらない氣がした。

夕暮、そろそろ暗くなる頃、私達は船に乗つてゐた。爺やが漕いでゆくと、魚が驚いたやうに暗い川の中から時時とびあがつた。

「ねえ、パッパ、もし船がひつくりかへつたらどうなるの？」

私はどんな場合でも何か危険な事が起つた時、必ず助けてくれるであらう父を體いつばい感じて安心してゐた。併し今ふいとそんな氣がして來たのだ。

「水の中では俺は駄目だよ。パッパは泳げないからな」。私はその時、なんだか寂しいやうな氣がした。何時もの父の愛情から推して、私はもつと頼もしい返事を要求してゐたのだ。

らう。

併し私は黙つてゐた。そして一人になつてどんな事でも出来ると信じてゐた父もどうする事も出来ない大きいものがまだ上にある事を感じた。おぼろげな恐怖、それは恐らく死であらう。

夜になると、父は庭に出て行つた。そして闇の中にゆつくりしやがんで枯れた松葉を集めて焚火をした。

母は浴衣を着て、そこらをふらふら歩いてゐた。私は母が日よりも東京での生活が好きな事を、そして子供達の爲にかうしてゐるのだらうと云ふ事を、その年はじめて考へてみるやうになつた。

家の傍の路を通つて、川へ船を出しに行く五六人の男の人達を通つた。

「フウん、風流なもんだな、松を焚いて君を慰むるか」

少し酔つたやうな聲で、通りすがりに、一人がこんな事を云つて通つた。父はしやがんで、

少しうつむくやうにしてクツクツと一人で笑つてゐた。母は苦いやうな變な笑ひかたをした。母はいやに眞面目な女である。子供にとつての母は一向に魅力の無い詰らない存在でしかなかった。母は冗談を嫌つたし、輕薄さの持つほんの片はしをも憎むやうな激しい氣性を持つてゐた。そのくせ彼女は父の持つ何か底の解らないおどろかしい魅力のやうなものととても愛してゐたやうだ。

父と母とが仲の好いやうに感じられた記憶は、私には殆ど見附からない。

愛情のやうな雰圍氣、それは父が一人で作つて、一人で（自分でも知らないで）あたりの妻や子供や家、本、空氣にまで振り撒いてゐただけだ。

父はまた落著いて物を片附ける事が好きだつた。埃が積つた本を引出して、羽みたいなもので丹念に拂つてゐる時など、如何にも楽しさうにしてゐた。

「なんでもない事が楽しいやうでなくてはいけない」と云ふのが父の氣持だつた。所が子供の私にそんな事が解る筈は無かつた。

唯自分が遊んでゐる傍に、いつも落著いた父が葉巻をふかすか本を讀むかしてじつとしてゐてくれると、父の持つやはらかな楽しい氣持が乗りうつて来るやうで、とても楽しかつた。子供の時、出来るだけ狭いものの中に身を小さくちぢめて、何んとも云へない幸福感を感じたものだつたが、あの感じに似てゐた。

その年、毎晩夜になると、父は星を見に家の前の川岸に出掛けた。母も弟も詰らながつてついて來ないので、私一人が毎晩一緒に行つた。

提灯に灯をつけてゐる父の脊中から私は寄つかかるやうにして聞いた。

「パッパ、何してるの？」

「星を見に行くんだ。アンヌコも一緒に來るか」

父は私を「アンヌ、アンヌ」と呼んだ。そして愛稱の意味もあるのか、アンヌにわざと「コ」を附けて、「アンヌコ、ヌコヌコヤ」などと云つてふざけた。

父の脊中に寄りかかつてゐると、父の太い首筋に葉巻と雲脂のまじつた懐しい匂ひがする。

父はがつちりしてゐて手や足は白かつた。そして足首の所で紐でいはへるやうになつた白い縮ちぢみのズボン下を穿きいてゐた。

私は父の大きい、骨ばつたやはらかい白い手につかまつて外に出た。

父は提灯を川岸の石の段に置いて、地圖みたいなものを擴げてしやがむと、しきりに何か調べてゐた。

私は草履の先を川の水に濡らしたり、歌を歌つたりしながら、傍で遊んでゐた。素足に竹の皮の草履が痛かつた。

父は星の話をしなかつた。一人で何か調べて黙つてゐた。そして或る時間が過ぎると、

「もう歸らう」

と云ふだけだ。

父の死後、長い間、母と私は家の中で泣いてばかりゐた。

はじめて外に出て、私達は暗いガアドの下を通つてゐた。母は

「あの星がパッパのやうな氣がするよ」

と云つた。星がほんとにたつた一つ光つてゐた。私はほんとにそんな氣がして來て泣きさうになつた。母も泣きたいのをやつと我慢してゐるのが感じられた。二人とも随分長い間泣いてばかりゐたものだ。

或日私がその星の書いてある圖を持出して見てゐる所へ母が來た。

「杏奴ちゃん、そんな事するのはよしておくれ」

と母が云つた。

「パッパも星を調べてゐたら直き死んでしまつた。そんなものを見ると、お前も死ぬやうな氣がして來る」

私は急に寂しいものになつてしまつたやうな母を見て、迷信だと笑つてしまへない愛情だの、變な恐怖を感じた。

私は星を調べる事を止してしまつた。

其の夏から翌年の夏までの一年間が、父との十四年の短い生活の最後の一年間であつたのだ。父は眼に見えない程、少しづつ、衰弱して行つてゐた。

母はそれを知つてゐた。でも死を思つてはゐなかつたらう。

私と小さい弟の類は何んにも知らないでゐた。

父との思出の夏は過ぎた。

さうして私は、翌年の三月に受ける女學校への試験準備の爲に、晝夜を分たず勉強ばかりして、恐ろしく神経を尖らしてゐた。不得手な數學が恐怖と厭惡の入りまじつた大きなかたまりとなつて頭から私をおさへつけた。

私は瘦せて、一寸した事にも怒りやすくなつてゐた。

父は私に數學を教へる爲に學校を休ませて、毎日のやうに私を役所に連れて行つて、自分の部屋で勉強させた。